



Good News for Japan **とぎのこえ**

平成二十九年 四月一日発行
昭和二十二年 一月二十四日(第三種郵便物認可)
明治二十八年 創刊 毎月一日・十五日発行

立ち上がらせてくださる方

石川 和男



今年のイースターは
4月16日です

「私は復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」
人は衣食住だけでは「生き活きと生きる」ことはできません。神様を感じることでできる「魂」が満たされてこそ、人は活き活きと

生きる事ができるのです。聖書に記された神様の御言葉は、この「魂」を唯一満たすことができるものです。
人生には理不尽なこと、不可解なことが起こるものです。日々、わたしたちは挫折や傷つくことを経験します。主イエス様は、そんな傷つき、途方に暮れている人々のかたわらに立ち、その心に寄り添い、

立ち上がれない人々の手を取り、「しっかりといなさい。わたした」と起こしてください。さるのです。
主イエス様の御声を聞く時、わたしたちは、人生の中に起こる様々な、わたしたちを打ちのめすものに打ち勝つことができます。そして、主イエス様と共にいつでも立ち上がり、出直すことができるのです。

「神から生まれた人は皆、世に打ち勝つからです。世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です。だれが世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者ではありませんか。」(ヨハネの手紙一 5章4、5節)

クリスチャンはみな、イエス・キリストとの出会いを経験しています。この出会いこそ人生最大の奇跡でしょう。主イエス様との出会いがある限り、復活の奇跡もなんら不思議なことではありません。

「わたしを信じる者は、死んでも生きる。」
有限な肉体をもつわたしたちにとって、復活―死んでも生きる、ということにはどういう意味があるのでしょうか。
この世にある時に、いくらなんらかの成功体験を経験したとしても、わたしたちにとって究極的な恐れである「死」から逃れることはできません。古の世より、わたしたちは「死」をどうすれば回避できるか考え続けてきました。不老不死は、

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(コリントの信徒への手紙一 5章17節)
蝶を思い浮かべてみてください。卵―幼虫―さなぎ―と三つの全く違った体を経て、美しい羽根を備えた体になります。そこに、神様の創造の不思議を見ます。
「古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」という聖書の御言葉は、蝶の変化にも優る新しい命をわたしたちに約束している

今もわたしたち人間の切なる願いです。
メディアにあふれる「いつまでも元気で若々しく」というキャッチフレーズの裏には、死への恐れが横たわっているのではないのでしょうか。しかし、どんな薬や健康法を用いても、わたしたちの肉体は限界を迎えます。そんなわたしたちに、主イエス様は、「死んでも生きる」と呼びかけ、新しい命へと招いてくださっているのです。
復活された主イエス様は、今もわたしたちを新しい命へと招いておられます。あなたのかたわらに立って、立ち上がらせようと手を差し伸べておられるのです。
主イエス様が、あなたに新しい命を与えてくださるよう、お祈りいたします。
(救世軍士官(伝道者))

謹んで被災された方々にお見舞いを申し上げます。一日も早い心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

〈信仰の体験談〉

良き友との出会いから 誤りない人生へ

菅 静子



「春のうららの隅田川」の歌にある隅田川のほとり、旧東京市浅草区橋場町で、私は四人きょうだいの末娘として生まれ育ちました。母は九人きょうだいの長女で、弟妹は熱心な仏教徒、母の弟（私にとつては叔父）はお寺の住職になるほどで、キリスト教とは全く無関係な家庭環境でした。家業は石炭問屋で、家は石炭ストーブがあり、私たちは炬燵を使った経験はありませんでした。

しかし、こののどかで平穏な時は長く続かず、一九三七（昭和12）年、小学二年の時に日中戦争、小学校が国民学校と名を変えて六年の時、第二次世界大戦が始まりました。そして私が女学校三年の時、我が家は強制疎開に遭い、横浜の別荘に引っ越しました。

すばらしい友との出会い

終戦後、女学校を卒業すると、東京から千葉県に移った

旧制の専門学校に入学しました。

最初は寄宿生活を送りましたが、台風による大洪水で学校がしばらく休校になったのを機に、横浜から汽車通学をするようになりました。その時、浅草橋から乗ってくる同級生の駒田睦子さんと、行き帰りを共にするようになりませんでした。（彼女は普通の人ではない、どこか違う）と感じていましたが、睦子さんと親しくなり、その理由を知りました。彼女はクリスチャンで、その両親は救世軍の士官（キリスト教伝道者）だったので、家庭環境のあまりの違いに驚かされました。

イエス・キリストとの出会い

睦子さんと親交を深めていくうちに、有楽町の明治生命の講堂で毎土曜日におこなわれていた、キリスト教の伝道集会に誘われました。初めて出席したキリスト教の集会でそこで語られた説教に、心を奪われました。その説教は、イエス様が、井戸に水を汲みに来た女の人に、

「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水

がわき出る」（ヨハネによる福音書4章13、14節）

と語られた箇所からのものでした。

「これだ」

と、私はためらうことなく、導かれるまま初めて神様にお祈りをしました。

私の心は、渇き切っていた。世の中の矛盾にぶつかって、たくさん重荷を負い、満たされない気持ちでいっぱいでした。祈り終わると、何かわからないながら、心が軽くなるのを感じました。その日――一九四七年十二月六日の夜、私の人生は変えられたのです。

翌日から、新宿や浅草、池袋などでおこなわれていた路傍伝道に、睦子さんと二人で参加するようになりました。

クリスチャンとなつて

ところが、家族には、「家には仏教がある」と猛反対されました。聖書を家に置いてはおけず、分厚く重い旧新約聖書をカバンに入れて通学し、ノートの端に「私は絶対、救い主イエス・キリストに従う決心です」と書いて、必死に祈りました。すると、YMC Aに入入っていた義兄が、「悪いことではないから、信仰を認めてあげたら」と応援してくれたのです。こ

れが、私の祈りが応えられた最初のお恵みでした。

「だが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができません。……わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（ローマの信徒への手紙8章35、39節）

その後、働きが再開された救世軍（戦争中は活動が許されていなかった）の恵の座という祈りの場所で、イエス・キリストを救い主と信じる祈りをし、罪が赦され、救われた確信を与えられました。

青春時代

父は、戦争で工場を閉鎖し、行く先々で戦火に見舞われ、戦後、しばらく葛飾区内に持った工場も前述の台風で大損害を被り、年齢的にも、健康的にも再起が叶わなくなり、とうとう横浜の家も手放さざるを得なくなり、父は一回、二回と倒れ、三回目に倒れた時に亡くなりました。そのような中、母は、一年上の姉と私を学校に通わせてくれました。

苦学生となった私は、東京

イースターとは



神様の御子イエス・キリストが、十字架につけられて死んでから、三日目に生き返った（復活した）ことを記念する日を、こう呼びます。

イースター（復活祭）は、イエス・キリストのお生まれを祝うクリスマスと同じくらい、いえ、それ以上に大きな意味をもっています。キリスト教会では、この日をとても大切な日としてお祝いしています。

イエス・キリストの十字架の死は、神様の存在を認めず、自分勝手に生きる、私たち人間の罪の罰の身代わりでした。罪の結果である死を、イエス・キリストが引き受けてくださったことにより、私たちの罪が赦され、神様と和解し、永遠の滅びを免れることができるようになります。

そして、三日目の復活は、イエス・キリストを信じる私たちも永遠の命に復活できるようになったことを、表しています。

イースターは移動祭日で、「春分の後の最初の満月のすぐ後に来る日曜日」となっています。このため、毎年日付が変わります。

今年のイースターは
4月16日です



結婚した年のクリスマスに

神田神保町の古書店を一軒一軒回り、買いたい本をメモして歩きました。アルバイトをして、それらの欲しかった本を手に入れた時の喜びは、一入でした。それまでは、勉強して身を立てたいと思っていたのですが、視野を広げて、「食べるために働くのではなく、働くために生きたい」と思うようになりました。「困難も 神より賜う試みと感謝に変えて祈り励まん」とは、当時の私の心境です。その後、救世軍の本部でアルバイトをするはずだった睦子さんが健康をそねて入院したため、代わりに私がアルバイトをする事になりました。そして、学校卒業後は、そのまま正規の職員となり、女性の伝道者の方と一緒に、本部の上の階にある部屋に住むようになりました。そのため、救世軍がおこなうほとんどの集会に出席でき、信仰浅い私にとって、本当に貴重な時を過ごすことができました。特に、本部の屋上は私一人だけのまたとない祈りの場でした。



富田林時代、家族と (前列右端)

最初、京都に四年住み、この間、二人の男の子を与えられました。次に、大阪府茨木市に移り、この地にある救世軍の児童養護施設に、夫と共に足掛け八年勤めました。その後、夫が富田林市にある知的障がい者施設に勤めたため、私は専業主婦となりました。

結婚、そして新たな出会い

時を経て、一九五九(昭和34)年七月、睦子さんのご両親が仲人になってくださり、旧満州で終戦を迎えシベリア抑留から戻ってきた、菅信一と結婚しました。

夫は、障がい者施設での働きの後、別の施設に勤めましたが、病を得て退職しました。

夫を天に送って

夫は、障がい者施設での働きの後、別の施設に勤めましたが、病を得て退職しました。

ここには二十年いましたが、すばらしい仲間と奉仕に出会いました。一つは、一人の救世軍の信徒と二人の他教会員、それに私を加えて四人で、地域の子どもたちを集めて子ども会を始めたことです。春休み、夏休み、クリスマスにおこないました。特にクリスマスには、プレゼント作りや、出し物の台本、音楽、演出など、それぞれの賜物を出し合い、助け合って、楽しく準備をし、当日大勢の子どもたちを迎えました。

もう一つは、手話の学びと奉仕です。当時、義母が我が家で暮らしていました。聴覚障がいのお甥が訪ねて来て筆談をしているのを見て、手話を習おうと決心しました。講習会に通い、キリスト教の手話を学ぶ機会も与えられ、聴覚障がい者の教会の礼拝や聖書研究会に出席して、交流するようになりました。その後、救世軍の大きな大会での手話通訳の奉仕や、聴覚障がい者の方が信仰の学びを経て洗礼を受けるまでのお手伝いも、させていただきました。



タンバリン隊の一員として (左から2人目)

夫の入院中も、たくさんの方々の祈りとお助けをいただき、神様はいつも私たちのそばにいて慰め励ましてくださることを、はつきりと知ることができました。一九九九(平成11)年五月十五日、夫は、関わってくださった方々への感謝と「幸せな生涯であった」との言葉を遺して、天に召されました。

一人になった私は、しばらくお休みしていた救世軍天満小隊(教会にあたる)に再び出席するようになりました。ここでは、求道者がクリスチャンになるまでの学びや訓練をする役目をいただきました。現在は同じ役目をもつもう一人の信徒と共に、祈祷課題の提案をしたり、記録係を担当したりしています。

Form with fields for name, address, and other contact information, enclosed in a dashed border.

私は、若い日に神様に従う生活に変えられて、行くべき道が開かれ、誤りない人生を歩ませていただきました。すばらしいことに、そのきっかけをつくってくれた睦子さんは、私が結婚して数年後、なんと夫の兄の光と結婚したのです! 睦子さんと義理の姉妹となったことは、本当に幸せでした。神様の不思議なご計画に感謝するばかりです。彼女は義兄と共に救世軍で良い奉仕をし、昨年、天に召されました。

来し方を振り返り

私は、若い日に神様に従う生活に変えられて、行くべき道が開かれ、誤りない人生を歩ませていただきました。すばらしいことに、そのきっかけをつくってくれた睦子さんは、私が結婚して数年後、なんと夫の兄の光と結婚したのです! 睦子さんと義理の姉妹となったことは、本当に幸せでした。神様の不思議なご計画に感謝するばかりです。彼女は義兄と共に救世軍で良い奉仕をし、昨年、天に召されました。



今は天国にいる、生涯の友であり義姉の睦子と義兄光

この部分を封書か葉書に貼り、裏面の下の救世軍にお送りください。

創立者 ウィリアム・ブース 大将 アンドレ・コックス (万国本営 英国 ロンドン) 日本司令官 ケネス・メイナ (救世軍本営 東京都千代田区) http://www.salvationarmy.or.jp



世界をみつめて

〈日本〉東京・恵比寿に、救世軍の新会館完成!

2月25日(土)、渋谷小隊(教会にあたる)・恵比寿S Aビル(テナント)の落成式がおこなわれました。耐震基準を満たす必要からの改築でしたが、信徒をはじめ、日本全国の救世軍関係者、多くの支援者のご献金などによって、新会館が実現しました。



窓辺に緑を配したビル



救世軍の緊急宿泊所を通して、「ハーバーライト」にたどり着いた時には、「あなたの残された人生、アルコールを飲み続けて死を待つか、何か違う決断をするしかないですよ」と宣告されました。

ジョセフは「ハーバーライト」で、アルコール依存からの回復と自立を目指し、必要な教育やグループセラピー、1対1のカウンセリングを受けました。彼は言っています。「私は、高校の課程とカウンセリング・コースの初級を終了し、自分の経験を基にした本も出版しました。救世軍は私にとって施設以上の存在です。社会復帰でき、もう自分のことを恥じることはありません。毎日元気に朝起きて、調理師として働いています。救世軍がなかったら、私はお酒を飲んで、もう死んでいたことでしょう。」

〈日本〉東日本大震災被災地復興支援

東日本大震災から6年、救世軍では、災害対策室女川事務所を中心に、継続支援がなされています。

3月3日(土)、宮城県南三陸町の「株式会社南三陸まちづくり未来」様より、「南三陸志津川さんさん商店街」オープニングセレモニーの席上で、感謝状をいただきました。



これは、2012年、仮設店舗商店街「南三陸さんさん商店街」の設置に際し、救世軍が支援したエアコンや放送設備等を、この度開設した、新しい商店街でも使用することになったことによるものです。



〈カナダ〉アルコール漬けの人生からの解放



創立当初から、救世軍はアルコールの害に苦しむ人々のための支援活動をしており、現在では、薬物などの様々な依存症者への支援も進めています。

救世軍のカナダ及びバミューダ地区には、様々な依存症に苦しむ人々の回復支援施設が16カ所ありますが、その中の1つ、バンクーバーにある「ハーバーライト」に出合った一人の男性の経験談をご紹介します。

彼の名前は、ジョセフ。30年間アルコール漬けの生活をし、仕事も、妻も、家族も失いました。ついには街頭生活に陥り、

アルコール依存症者支援施設

- **自省館 (救護施設)**
生活の場を提供し、回復のために、個別支援計画に基づく生活及び自立支援をおこなっています。 TEL 042-493-5374
- **男子社会奉仕センター**
バザー場での作業を通して、身体的・精神的回復を図り、社会復帰できるよう支援しています。 TEL 03-5860-2992

救世軍バザー場のご案内

- **救世軍バザー場** TEL 03-5860-2992
東京都杉並区和田2-21-2
中野富士見町駅(東京メトロ丸の内線)下車徒歩10分
オープン 毎週土曜日 9時~13時半
- **江東出張所** TEL 03-6261-5704
東京都墨田区太平4-11-3
錦糸町駅(東京メトロ半蔵門線、JR)下車徒歩10分
オープン 毎週土曜日 10時~15時

今年は、四月二日(八日)が

酒害強調週間です

救世軍とは The Salvation Army

世界百二十八の国と地域で活動する、プロテスタントのキリスト教会です。

一八六五年、イギリスのメソジスト教会の牧師だったウィリアム・ブースによって始められ、貧しい人々、家のない人々、仕事に就けない人々、アルコールにおぼれる人々、搾取される女性たち、顧みられない子どもたち、災害に遭った人々……などに助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本での働きは、一八九五(明治28)年に始まりました。伝道の拠点である小隊(教会にあたる)を開設し、廃娼運動を積極的におこない、失業者対策、児童養護や女性保護、結核療養所の設立、アルコール依存症者支援施設で、断酒と個別支援計画に基づく自立支援の働きをおこなっています。また、毎年、酒害強調週間を設けて啓発に努めています。

『禁酒のすすめ』の本、講演会などで酒の害を説いてきました。現在も、アルコール依存症者支援施設で、断酒と個別支援計画に基づく自立支援の働きをおこなっています。

日本では、『ときのことえ』、

ル依存症者回復支援など、時代にさきがけて、人々の必要に応える様々な働きを興してきました。

これらの働きの中でも、アルコール依存症者の回復支援は、救世軍がその草創期から取り組んできたものです。酒のために自分の人生ばかりか家族の生活をも狂わせてしまう、この病気からの脱出の道を提供する団体として、信徒たちは率先して酒類を摂らない生活を送っています。

(取扱支部)

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

発行日及び定価
発行日 毎月一日・十五日
定価 一日号一部四〇円(六六円) 十五日号一部六〇円(六六円) クリスマス特集号(十二月一日号) 一部一〇〇円(七七〇円) 一年分二二六〇円(送料七五〇円) 振替・〇〇一八〇五四四〇〇

発行兼印刷人 救世軍 代表者 ケネス・メイナ 寺澤 眞由子

〒101-0051 東京都千代田区 神田神保町二丁目十七番 救世軍本営 図書印刷株式会社

電話 東京(03)三三七〇八八一